

# 児童に於ける Personal Space の発達と性差<sup>註1</sup>

井原成男

## はじめに

人と人との間にある空間は単に物理的空間であるばかりでなく、また人間的な歪みをもった空間でもある。Little(1965)はこの人と人との間に介在する空間を personal space と呼び、これを「ある特定の個人を取りまく空間であり、その中で他人との相互交渉の大部分が生起する領域である」と定義した。彼はこの定義に基づいて personal space を研究してきた(Little, 1965, 1968, Little ら, 1968)<sup>註2</sup>。Kuethe (1962a) は、2つの対象を「この2つは同じ部類に属する」と教示して被験者に与えるといくつかの social schema あるいは plan がつかわれるという事実を見出した。この対象が人であったり、人のシンボルであった場合、そこに使われたシエマは社会的なシエマと考えてよいと思われる。彼はこの社会的シエマ (social schema) を様々な側面から研究してきた (Kuethe, 1962a, 1962b, 1963, 1964a, 1964b)<sup>註3</sup>。

Little (1965) はこの社会的シエマの概念と方法を援用しながら自分自身の personal space に関する研究を展開していった。この意味では、Little のいう personal space とは social personal schema であるといった方がより適切であると思われる。personal space は個々人の内部に於ては social schema として形づくられているのである。

しかし、このシエマが個々人の発達のプロセスの中でどんな風に形成されていくのかについてはまとまった研究がなく、あまり詳しくは分っていない。本研究では社会的シエマ social schema としての personal space の概念が発達的にみてどのようなプロセスを経て形成されていくのかについて研究したいと思う。

本研究の目的は personal space schema の発達と、それが何才で確立されるかを Kuethe と Little によって発展させられてきた方法を使って明らかにすることである。

対人距離と知り合いの程度 (strangeness) には反比例の関係があるのではないかという仮説を使いながら、我々は次のような目的を追求したい。(a)性差の形成は何才か。(b)シルエットを使った投影的方法が Hall (1964) のいう personal space についての距離の次元に対応しているかどうか。<sup>註4</sup>

## 方法

### 被験児

本研究で対象にしたのは東京都江東区立第二砂町小学校の児童である。4年生43人(男児16名, 女児19名), 5年生39人(男児17名, 女児22名), 6年生43人(男児21名, 女児22名)の合計111人であった。この3学年を対象として選んだのは Jones & Aiello(1973)によるものである。彼らは性差が5年生で確立すると考えている。

### 実験材料

本実験で使われた材料は以下の通りである。

I カードボードシート。10枚の18×25cmのカードボードシート。(1枚は練習用である。)各条件を説明する教示がカードボードの上に記入されている。

### 教示

条件 (Condition) 1. この2人は初めて会いました (Stranger)。2人とも男の人 (Male) です。

条件2. この2人は知り合いです (Acquaintance)。2人とも男の人です。

条件3. この2人は仲の良い友人どうしです

(Friend)。2人とも男の人です。

条件4. この2人は初めて会いました。1人は男の人 (Male) 1人は女の人 (Female) です。

条件5. この2人は知り合いです。1人は男の人, 1人は女の人です。

条件6. この2人は仲の良い友人どうしです。1人は男の人, 1人は女の人です。

条件7. この2人は初めて会いました。2人と

### 手 続 き

それぞれの被験児は自分のクラスで、集団法によってテストされた。実験の説明をしたあとで、実験者はそれぞれの被験者に実験材料を渡し、次のように教示した。「ここに20枚のシルエットがあります。10枚は男の人, あとの10枚は女の人です。」練習のあとで被験児に次のように話した。「この2人は5分ぐらい話をします。カードの上

Table 1. Breakdown of situation.

unfamiliarity ↓ familiarity	Sex of object	Male-Male	Male-Female	Female-Female
	Strangeness			
	Stranger	Condition 1	4	7
	Acquaintance	2	5	8
	Friend	3	6	9



Fig.1. Male and female figures (Kueth's method).

も女の人 (Female) です。

条件8. この2人は知り合いです。2人とも女の人です。

条件9. この2人は仲の良い友人どうしです。2人とも女の人です。

### II 糊

III シルエット (Male and female figures)。男性の姿をあらわしたシルエット10枚と女性の姿をあらわしたシルエット10枚。

に書いてあることばをみてよく理解してから線の上にシルエットを貼りつけて下さい。好きなように貼りつけてかまいません。」各カードボードシートには線が書かれている。この線はそこが地面であることをしめし、その上に各被験児はシルエットを立てて貼りつけるのである。

### 結 果

#### 結 果 I

4年: Table 2は4年生における全体的な傾向の結果をしめしたものである。各細胞の数値は2つのシルエット間(身体の中心から中心間)の距離の平均値である。知り合いの程度(strangeness)の要因が有意であった( $F=11.29, P<.01$ )。

Table 2から分かるように2者間の距離と知り合いの程度(strangeness)の間には反比例の関係がある。性差(sex of object)の要因は有意でなかった。しかし、平均値の傾向からみると、

2者間の距離は男性と女性の組み合わせ(M-F)において最も大きく女性同志の組み合わせ(F-F)において最も小さいことが推測できる。 $[M-F > M-M > F-F]$

Table 3は男児についての結果であり、Table 4は女児についての結果である。男児については知

Table 2. Mean scores of interpersonal distances for Grade 4 (total).

Strangeness	Sex			Mean
	M-M	M-F	F-F	
Stranger	4.00	4.25	3.53	3.93
Acquaintance	2.75	2.92	2.75	3.04
Friend	1.99	2.21	2.04	2.08
Mean	2.91	3.13	2.77	

Table 3. Mean scores of interpersonal distances for Grade 4 (male).

Sex \ Strangeness	M-M	M-F	F-F	Mean
Stranger	4.31	4.45	3.85	4.20
Acquaintance	3.11	2.76	2.23	3.03
Friend	1.89	2.25	1.89	2.01
Mean	3.10	3.15	2.99	

Table 4. Mean scores of interpersonal distances for Grade 4 (female).

Sex \ Strangeness	M-M	M-F	F-F	Mean
Stranger	3.72	4.20	3.34	3.75
Acquaintance	2.47	3.22	2.37	2.69
Friend	2.10	2.17	2.08	2.12
Mean	2.76	3.20	2.60	

Table 5. Mean scores of interpersonal distances for Grade 5 (total).

Sex \ Strangeness	M-M	M-F	F-F	Mean
Stranger	5.38	6.57	4.86	5.60
Acquaintance	2.92	3.38	3.47	3.26
Friend	2.23	2.82	2.11	2.46
Mean	3.53	4.26	3.48	

Table 6. Mean scores of interpersonal distances for Grade 5 (male).

Sex \ Strangeness	M-M	M-F	F-F	Mean
Stranger	4.58	5.16	4.22	4.65
Acquaintance	3.71	4.06	3.98	3.92
Friend	2.31	3.03	2.37	2.57
Mean	3.53	4.08	3.53	

Table 7. Mean scores of interpersonal distances for Grade 5 (female).

Sex \ Strangeness	M-M	M-F	F-F	Mean
Stranger	5.99	7.66	5.36	6.34
Acquaintance	2.32	2.85	3.17	2.78
Friend	2.26	2.65	1.91	2.28
Mean	3.52	4.39	3.48	

り合いの程度 (strangeness) の要因のみが有意であった ( $F=7.03, P<.01$ )。女兒については知り合いの程度 (strangeness) 対象の性差 (sex of object) の両要因とも有意であった (strangeness :  $F=7.45, P<.01$ , sex :  $F=5.79, P<.01$ )。

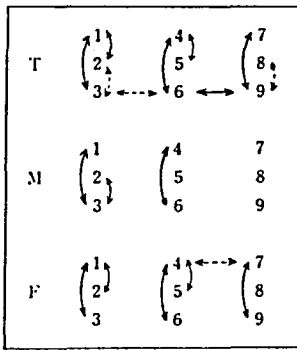
有意であり ( $F=22.66, P<.01$ ) < Table 8, Table 9 >, 性の要因については有意でなかった。Table 8, 9, 10から対象の性について, 男性と女性の組み合わせ (M-F) において 2者間の距離は最大となり, 男性同志の組み合わせ (M-M) において最小

しかし, 男児についても女兒についてもいえることは, 性の要因について男性と女性の組み合わせ (M-F) において個体間距離が最大であり, 女性同志 (F-F) の組み合わせにおいて最小であったということである。

5年生 : Table 5は5年生についての結果である。知り合いの程度の要因のみが有意であった ( $F=16.99, P<.01$ )。2者間の距離と知り合いの程度の間に反比例の関係があった。Table 6は男児についての結果, Table 7は女兒についての結果である。男児についても女兒についても知り合いの程度の要因のみが有意であった (male :  $F=4.86, P<.01$ , female :  $F=16.39, P<.01$ )。男児についても女兒についても, 対象の性差の要因は有意でなかったが, 2者間の距離は男性と女性の組み合わせ (M-F) において最大であり, 女性同志の組み合わせ (F-F) において最小という傾向をみせた。 [ $M-F > M-M > F-F$ ]

各条件間のTテストの結果をしめた Fig.2 からも同じ傾向を読みとれる。5年生は大まかにみて4年生と同じ傾向をもっていると結論できそうである。

6年生 : Table 8は6年生についての結果である。知り合いの程度 (strangeness), 性の要因 (sex) ともに有意であった (strangeness :  $F=82.79, P<.01$ , sex :  $F=13.20, P<.01$ )。しかし男児については知り合いの程度の要因のみが



\* Numbers correspond to those found in Table 1  
 \*  $\leftrightarrow$   $p < .02$   
 $\dashrightarrow$   $p < .05$   
 T (total) M (male Ss) F (female Ss)

Fig. 2. T-test between corresponding conditions in Grade 5.

Table 8. Mean scores of interpersonal distances for Grade 6 (total).

Strangeness	Sex			Mean
	M-M	M-F	F-F	
Stranger	4.02	5.28	4.19	4.50
Acquaintance	2.46	2.85	2.52	2.59
Friend	2.15	2.37	2.11	2.21
Mean	2.88	3.48	2.94	

Table 9. Mean scores of interpersonal distances for Grade 6 (male).

Strangeness	Sex			Mean
	M-M	M-F	F-F	
Stranger	3.35	3.88	3.49	3.57
Acquaintance	3.00	2.29	2.34	2.31
Friend	2.14	2.01	2.08	2.08
Mean	2.60	2.73	2.63	

Table 10. Mean scores of interpersonal distances for Grade 6 (female).

Strangeness	Sex			Mean
	M-M	M-F	F-F	
Stranger	4.65	6.61	4.86	5.37
Acquaintance	2.62	3.27	2.70	2.87
Friend	2.15	2.72	2.14	2.34
Mean	3.14	4.20	3.23	

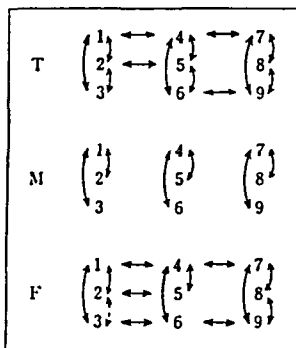


Fig. 3. T-test between corresponding conditions in Grade 6.

となる傾向のあることが分かった。[M-F > F-F > M-M] 男児についても女児についてもこの傾向は同じである。

4年生と5年生では男性と女性の組み合わせ(M-F)での対人距離が最大で、女性同志(F-F)の対人距離が最小であったことを振り返ってみると、6年生では男性同志の組み合わせ(M-M)と女性同志の組み合わせ(F-F)の順位が入れ替わっていることに気づく。この理由について考察するために Fig. 3 から各条件間のTテストの結果をみてみよう。そうすると、性の要因について、男性と女性の組み合わせ(M-F)と男性同志の組み合わせ(M-M)、あるいは男性と女性の組み合わせ(M-F)と女性同志(F-F)の間には有意であることが分かる。つまり、条件(Condition) 1と条件4(1↔4)、条件4と条件7(4↔7)にのみ有意なのであって、条件1と条件7(1↔7)の間では有意ではない。こういう理由で我々は男性同志の組み合わせ(M-M)と女性同志の組み合わせ(F-F)を傾向としてのみ比較することができる。これまでのにべた結果から対象の性差の要因は小学6年になってはじめて、そして男性と女性の組み合わせ(M-F)とそれ以外の組み合わせ(M-M, F-F)との間にはじめて結論できる。[M-F > M-M, F-F (cf. Jones & Aiello, 1973)]

6年男児について相互作用が有意であった( $F=49.76, P < .01$ )。これは、上でみた傾向が

見知らぬ人 (Stranger), 知り合い (Acquaintance), 仲のよい友人 (Friend) に対してそれぞれ異っていることによるものであろう。対人間の距離は見知らぬ人 (Stranger) としての男性と女性 (M-F) の組み合わせにおいて最大であるが、仲の良い友人 (Friend) としての男性と女性の組み

合わせ (M-F) においては最少になっている。6年男児は性のちがう見知らぬ人同志をより離れて話していると感じ、性のちがう仲の良い友人同志はより近づいて話すと考えているのである。この傾向は女児の被験者群においては見られなかった。いってみれば、6年になると男児の被験者と女児

の被験者では反応が有意に異ってくるということなのである。

Table 11. Results of T-testing between male and female Ss under each condition.

Condition No.	Grade 4		5		6	
	T		T		T	
1	0.064		1.012		2.312	0.5
2	1.884	10	1.679		2.817	*
3	0.470		0.140		0.046	
4	0.247		1.598		5.059	**
5	1.221		1.969		3.971	**
6	0.168		0.657		2.765	*
7	0.649		0.895		3.264	**
8	1.304		0.847		0.980	
9	0.528		1.745		0.350	

\*\* p < .005

\* p < .01

Table 12. Actual distances into which the paper figure distances were converted.

Condition No.	Grade 4	5	6
1	100	146	101
2	59	64	49
3	33	41	39
4	110	192	148
5	65	82	64
6	41	63	48
7	87	131	108
8	61	84	51
9	36	38	38

cm

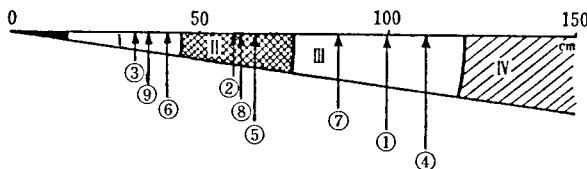


Fig. 4. Hall's conceptualized personal space zones showing where each condition fall (Grade 4).

- I. intimate zone (far phase)
- II. casual-personal zone (close phase)
- III. casual-personal zone (far phase)
- IV. social-consultative zone.

### 3 学年を通じてみられた一般的傾向

知り合いの程度の要因については3学年とも有意であり、それは男児についても女児についても同様であった。したがって、対人間の距離と知り合いの程度の間には反比例の関係があると結論できる。

性差の要因は6年全体、6年女児、4年女児において有意であった。したがって、男性と女性の組み合わせでの対人距離を最大にしてしまう傾向は特に女児において顕著であると結論できる。一方、6年の男児において性差の要因が有意でなく、知り合いの程度と性差の要因間の相互作用のみが有意であったという事実は、上の結論をもうひとつ別な方法で支持しているといえよう。

男児は2つのシルエットを仲の良い友人 (Friend) としての男

性と女性の組み合わせ(M-F)についてはより近づけておいている。これらのことから6年生において被験児の間に性差が確立されたことが分かる。

### 結果 II

Table 11 は各条件下の男女間(被験児)のTテストの結果である。4年生にも5年生にも有意差は認められなかったが、6年においては条件(condition) 2と条件6が1%レベルでそして条件4, 5, 7においては0.5%レベルで有意である。

条件1は見知らぬ人で男同志(Stranger × M-M), 条件2は知り合いで男同志(Acquaintance × M-M), 条件4は見知らぬ人で男性と女性(Stranger × M-F), 条件6は仲の良い友人で男性と女性(Friend × M-F), 条件7, 見知らぬ人で女同志(Stranger × F-F)である。この結果から, 被験児の男女差は, 見知らぬ人と男性・女性の組み合わせ(M-F)を軸にしておこっているといえよう。

Table 9, Table 10 から, 知り合いの程度についても対象の性差についても, 対人間距離は男児より女児の方が大きいことが分かる。したがって, 6年生において対人間距離の性差が明らかになり, この傾向は知り合いの程度(Strangeness), 対象の性差(sex of object)の両要因について

顕著になると結論づけることができよう。

### 結果 III

Table 12 はシルエットによってえられた距離を実際の物理的距離に換算したものである。Table 12 から Fig. 4, 5, 6 がえられた。I は密接距離(遠方相) II. 個体距離(近接相) III. 個体距離(遠方相) IV. 社会的距離である。

Fig. 4 から分かるように条件1, 4, 7(見知らぬ人 Stranger) は個体距離(遠方相)に, 条件2, 5, 8(知り合い Acquaintance) は個体距離(近接相)に, 条件3, 6, 9(仲の良い友人 Friend) は密接距離(遠方相)に入っている。<4年>

Fig. 5 から条件1, 4, 7(見知らぬ人 Stranger) は社会的距離(近接相)に, 条件2, 5, 8(知り合い Acquaintance) は個体距離に, 条件3, 6, 9(仲の良い友人 Friend) は密接距離と個体距離(遠方相)に入っていることが分かる。<5年>

Fig. 6 をみると, 条件1, 4, 7(Stranger) は個体距離(遠方相)と社会的距離, 条件2, 5, 8(Acquaintance) は個体距離(近接相), 条件3, 6, 9(Friend) は密接距離にそれぞれ入っている。<6年>

5年, 6年において他の領域に侵入しているのは条件4, 5, 6であり, これは性のちがう組み合わせつまり男性と女性の組み合わせである。

結果から, 被験児は見知らぬ人(Stranger)とは社会的距離あるいは個体距離(遠方相)で話し, 知り合いの人(Acquaintance)とは個体距離で話し, 仲の良い友人(Friend)とは密接距離(遠方相)で話すと考えているという結論をひきだしてよいように思う。しかし, それが性のちがうシルエットの組み合わせである場合には他の距離帯にとびだし, 対人間距離が最大になってしまうのである。

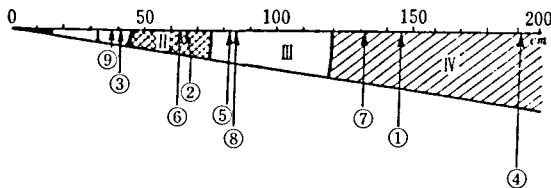


Fig. 5. Hall's conceptualized personal space zones showing where each condition fall (Grade 5).

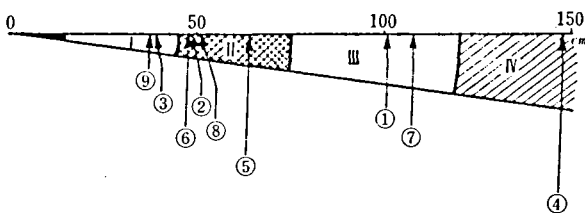


Fig. 6. Hall's conceptualized personal space zones showing where each condition fall (Grade 6).

## 考 察

本研究の結果を以下のように要約することができる。

### 知り合いの程度について

各学年について対人距離と知り合いの程度の間には反比例の関係のあることが分った。つまり、シルエット間の相互作用の距離は2者間の知り合いの程度の知覚によって影響をうけるのである。2つのシルエットが「仲の良い友人」と見なされた場合有意に接近して関係し、もし「見知らぬ人」と見なされた場合には有意に遠ざかって関係するということが予想される。

対象の性差によっても違いが生じることが分ったので、personal spaceに放ける性の要因についても論じなければならぬだろうと思う。この点について次にのべてみたい。

### 対象の性差と被験児の性差について

性の要因について、(1)この要因が6年生において有意になること(2)異性より距離をとって交渉することが女兒の被験者群において顕著であるという2つのことが分った。反対に、男児についてみると異性で見知らぬ人とはより距離をとって交渉するが、異性であってもそれが仲の良い友人である場合にはより接近して交渉するという結果がえられた。つまり、異性に対する反応のシエマは男児と女兒で異っている。

性差について調査した研究の多くは異性同志がより接近して交渉する傾向があることを指摘している(Evans, 1973)。Kueth(1962, 1964)もまた男性と女性の組み合わせのシルエットはより接近して置かれる傾向があるとしている。しかしながら、これらの研究はアメリカの文化圏での成人によってえられた結果であるということを思い出していただきたい。

本研究では男性と女性間の対人距離は最も大きい(異性同志はより距離をおいて交渉する)という、前述の傾向とは逆の結果がえられたが、この結果については2つの解釈が可能である。(1)日本でのpersonal spaceのパターンはアメリカ文

化でのそれとちがっている。(2)子どものpersonal spaceのパターンは大人のパターンとは異なる。子どもでは、異性の対象との間にとる対人距離はその対象のもっている関係性によってしだいに分化し、その後、大人のpersonal spaceのパターンに同化していくという2つの解釈である。

これについては(2)の可能性が大きい。というのも、日本での大人の被験者についての結果は6年男子の傾向にもみられたように、アメリカ文化でのパターンと同じ傾向をみせたからである。しかし、大人の被験者の数が少なかった(N=3)ので結論を下すことはできない。さらに被験者の数を増やして組織的な実験を行う必要がある。

Meisels & Gurdo (1969)は「子どもは成長するにつれて社会的状況を以前よりもっと上手に、快適に処理できるようになり、その結果異性への関心を深めていくのである」とのべている。彼は異性どうしの対で、女兒が異性との間により大きな距離をとってしまうという結果について、性役割の同一視という社会化のプロセスがそこに働いていることを指摘している。

Heshka & Nelson (1972)が説明するところによれば、女性が男性よりもずっと大きく相手との間に距離をとるという事実は、男性には攻撃的であることや自発的であることが奨励され、女性には用心深くかつ慎重深いことがよしとされるという社会化のプロセスの観点から解釈することができる。本研究の結果によっても女兒は男児より相手との間により大きな距離をとるという事実が確認された(結果Ⅱ)。

### シルエットによって得られた距離と実際の距離との対応

シルエットによってえられた距離が実際の物理的距離に対応しているという事実によって、シルエットによる結果は実際の空間行動を反映しているということが示された。すなわち、被験児は仲の良い友だちと密接距離で話し、見知らぬ人とは個体距離(遠方相)あるいは社会的距離で、そして知り合いとは個体距離で話すのである。これはHall (1964)の4つの距離帯における実際の空間行動を反映している。

ちなみに、密接距離（遠方相）は非常に親密な関係のおこる距離、個体距離はとても親しい人との間にとる距離、個体距離（遠方相）は個人的な関心事について話される距離、そして社会的距離は非個人的 (impersonal) な仕事や社会的交渉にたいしてとられる距離帯である。

### personal space の確立

最後に personal space は何才で確立されるかという問題に簡単に触れてみたい。Evans (1973) は児童に於ける personal space の研究を概観して、personal space が確立するのは12才であると結論している。本研究でも、(1)6年で性差が有意になる、(2)6年の傾向は大人のパターンと同じものに近づいている、(3)6年において安定した結果がみられたという3点を根拠にして、personal space は小学校6年生において確立すると結論しておこう。

### 結 論

結果から以下の結論がえられた。

- (1) 対人間距離と知り合いの程度の間には反比例の関係がある。
- (2) 対象の性差の要因は6年生で有意になる。
- (3) シルエットによる対人距離はその対が異性同志であるとより大きくなる。この傾向は特に女兒の被験者群において顕著だった。
- (4) 男児の被験者群について、異性に対するときの対人距離は対象の特性によって（対象が見知らぬ人であるか仲の良い友人であるかによって）変化する。personal space の分化が6年においておこる。
- (5) 女兒は男児より2者間の距離を大きくとる傾向がある。
- (6) シルエットを使った結果は実際の物理的距離と行動を反映しているように思われる。
- (7) personal space は小学校6年生において確立する。

### 要 約

personal space の発達を小学校4, 5, 6年の男児54名、女兒63名について調査した。被験者

はカードに記入されたいくつかの状況について好きなように、シルエットにした人物像を貼りつけて対人距離をつくった。

主な結果は次のようなものだった。(1)対人距離と知り合いの程度の反比例の関係が4, 5, 6年で成立している。(2)対象の性差の要因は6年において有意になる。(3)シルエットを使ってえられた結果は実際の物理的距離と空間行動を反映している。結果について、性役割の同一視という社会化のプロセスがおこっているという観点から考察が加えられた。

### 参考 引 用 文 献

- Evans, G.W. & Howard, R.B. 1973 Personal space, *Psychol. Bull.*, 80,334-344.
- Hall, E.T. 1959 *Silent Language*, Doubleday.
- Hall, E.T. 1966 *The Hidden Dimension*, Doubleday.
- Heshka, S. & Nelson, Y. 1972 Interpersonal speaking distances as function of age, sex and relationship, *Sociometry*, 35, 491-498.
- 井原成男 1975a Personal space の発達の研究(1), 日本教育心理学会第17回総会発表論文集114-115.
- 井原成男 1975b Personal space の発達の研究(2), 日本心理学会第39回大会発表論文集, 308.
- 井原成男 1977 Personal space の発達の研究(3), 日本心理学会第41回大会発表論文集, 830-831.
- Jones, S.E. & Aiello, J.R. 1973 Proxemic behavior of black and white first, third and fifth grade children, *J. Pers. Soc. Psychol.*, 25, 21-27.
- Kuethé, J.L. 1962a Social schema, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 64, 31-38.
- Kuethé, J.L. 1962b Social schema and the reconstruction of social object displays from memory, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 65,71-74.
- Kuethé, J.L. & Sticker, G. 1963 Man and woman; social schemata of males and females, *Psychol. Rep.*, 13, 655-661.
- Kuethé, J.L. 1964a Pervasive influence of social schemata, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 68, 248-254.
- Kuethé, J.L. & Weingartner, H. 1964b Male-female schemata of homosexual personality inmates, *J. Pers.*, 32,23-31.
- Little, K.B. 1965 Personal space, *J. Exp. Soc.*



Psychol., 1, 237-247.

Little, K.B. 1968 Cultural variations in social-schemata, J. Pers. Psychol., 10,1-7.

Little, K.B., Ulehla, Z.J. & Henderson, C. 1968 Value congruence and interaction distances, J. Soc. Psychol., 75, 249-253.

Meisels, M. & Guardo, C.J. 1969 Development of personal space schemata, Child Development, 40, 1167-1178.

注

1. 本稿は(Ihara, N. 1978 The Development of Personal Space in Japanese Children, Journal of Child Development, vol. 14,42-51.)を日本語に書き改めたものである。文中の表や図は原文のまま用いた。

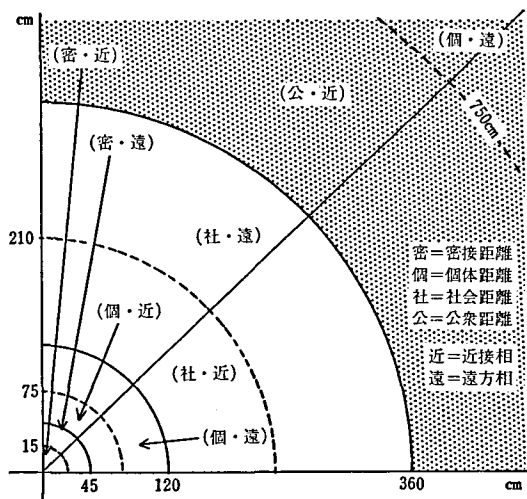
2. Little(1965)は personal space を「一連ののびちみ (fluctuate) する同心円であり、それぞれの円はある特定の型の相互作用に必要な領域である。またその中で他人との相互作用の大部分がおこる個人の身のまわりの領域である」と定義して、personal space の社会的相互作用の面を強調している。

3. Kuethe(1962a)は、「個人は種として、民族として、また宗教をもっているという理由で、他の人間とつるんだ認知的一単位として考えられる」(傍点引用者)とし、「社会的知覚に於ける原理を形成しているこの単位は、それが人間対象も含んだところの状況を構成できるように機能している限りに於て“社会的シエマ”あるいは“反応セット”として考えることができる」として、社会的シエマの概念を定義した。

4. Hall (1959,1966)は communication の中で空間が果たす非言語的な表現の働きに注目し、個人を中心として同心円状に拡がる領域を区切る、質のちがった4つの距離帯を設定して、これに、近い方から順に密接距離・個体距離・社会距離・公衆距離と名づけた。彼は最初、この距離帯を、二人の間の声の質の変化する場所を目安として8つの距離帯をもうけていたのだが、後になって、文化的要因を重視し、さらに対人的な相互作用に注目するという観点からこれを上述した4つの距離帯に改変し、それぞれの距離帯に近接相と遠方相をもうけ、結局8つの距離帯を設定したのである。彼はさらにこの距離帯の質を区別すべく、距離帯がちがうことによって筋覚、温度感覚、嗅覚、視覚、発声聴覚が内容的にどのように変化していくかということの詳細に渡っ

て調べ表にしている(1966,177-178)。ここでは、この距離帯が異なることによって、相互作用の質がどのように変化してくるかということについて説明しよう。まず、(1)密接距離—近接相(0-15cm)は最も触覚が使用される距離帯である。これは極めて密接な関係のいとなまれる距離である。彼はこれを愛撫、慰め、保護の距離であると呼んでいる。逆にこの距離は格闘の距離でもある。即ち、この距離帯は身体的接触 (involvement) の可能性が最大の距離なのである。(2)密接距離—遠方相(15-45cm)は身体的接触の可能性は手などに限られているが、なお身体的 involvement の大きい距離帯である。Hallはこの密接距離の使い方が文化によって異なっていることを強調している。(例えばアメリカ人は他人がこの範囲に入ってくると不快感を感じるが、アラブ人はそうでないとのべている。)次に、彼は個体距離をとりあげている。これは生物が自然な状態で相手との間に保つあわ(bubble)のようなものである。この距離帯(3)の近接相(45-75cm)は自分の手足で相手に何かをしかけることのできる距離帯である。この距離は極く親しい人々の間でとられる距離であるということから密接距離の遠方相にも似た性質をもっている。「妻が夫の個体距離帯の中に入ってきては何んのことはない。しかし他の婦人がそうすると話は全く別である」とHallは説明している。(4)次に個体距離の遠方相(75-120cm)は、「個人的な関心や関係を論議することができる」距離であるとされている。この距離の外にでると身体的支配は不可能になる。この距離帯と次の社会的距離の間に「支配の限界」がある。(5)社会距離の

〔図1〕 Hallによる8つの距離帯



近接相（120—240cm）は個人的でない用件，社会的交渉のさいにとられる距離である。(6) 社会的距離—遠方相（240—360cm）はごく事務的な交りのなされる距離であり，「防衛的」意味も強くなっていく。最後に(7) 公衆距離（360cm—）は完全に **involvement** の外側にある距離帯である。この

距離はまた，人間が種外の他者（動物）との間におく距離である。Hall はこれら人間に於ける距離の使い方を「プロクセミックス」という名のもとに総称した。これが現在のところ距離について最も総括的体系となっている。（図1参照）